View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

provided by Kyoto University Research Information Repository

KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

KYOTO UNIVERSITY

Title	Study for Etiology of Nephritis(Abstract_要旨)
Author(s)	Kaburagi, Tsuneo
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1962-12-18
URL	http://hdl.handle.net/2433/210969
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

Kyoto University

【61】

氏名	鏑木恒男（かぶらぎつねお）
学位の種類	医学博士
学位記番号	医博第88号
学位授与の日付	昭和37年12月18日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
研究科・専攻	医学研究科内科系専攻
学位論文題目	**Study for Etiology of Nephritis** （腎炎の病因の研究）
論文調査委員	（主査）教授 前川孫二郎　教授 三宅　儀　教授 脇坂行一

論文内容の要旨

第1編，臨床研究：急性腎炎発症の原因，急性腎炎から移行する慢性腎炎と，急性発症不明慢性腎炎の発症の相異および慢性腎炎の再燃時の病因ネフローゼ症候群の発生原因追求のため，溶連菌感染との関係を中心に研究した。症例は，前川内科入院の腎炎およびネフローゼ症候群の患者58例で，発病様式，経過および腎生検所見により急性腎炎治癒群2例，同活性群2例，腎炎後蛋白尿群14例，亜急性期腎炎群4例，急性発症慢性化腎炎16例（中再燃6例），急性発症不明慢性腎炎8例（中再燃3例），間質性腎炎1例，ネフローゼ症候群8例である。咽頭培養 ASLO，CRP 補体の測定を行い，一部については数種のウイルス補体結合反応の結果について検討し，扁摘に際し，摘出扁桃腺の溶連菌培養，組織学的検査，摘出前後の臨床症状の変化およびその後の影響について検索した。

結果：先行感染は急性腎炎発症時および慢性腎炎再燃時には認められるが，ネフローゼ症候群では認める例が少く，急性発症不明慢性腎炎では不明であった。急性腎炎発症後早期の入院例では，ASLO も上昇し，咽頭培養により溶連菌（A群特に12型菌）を多く証明したが，間質性腎炎，ネフローゼ症候群では証明できず，急性腎炎慢性化腎炎群の再燃例では感染で認めても溶連菌感染を証明できず，B型インフルエンザの感染後腎炎の再燃をきたしたと思われる例を認め，急性発症不明慢性腎炎の再燃3例中2例に溶連菌感染を認め，両者の再燃の発症機構に少数例ではあるが差異を認めた。発病後3月以上経過して入院した例では，急性腎炎1例に ASLO の上昇を認めたのみで，腎炎後の蛋白尿群，亜急性期腎炎群，慢性腎炎群，ネフローゼ症候群では溶連菌感染を認めず，これらの症状の進展に直接の関与は認められなかった。腎炎患者の扁桃の肥大発赤等の咽頭所見陽性例はネフローゼ症候群以外では高率に認めた。

これら肥大扁桃腺の腎炎における役割を知るために急性期を過ぎ，抗生剤を充分使用後，扁摘を行った。扁摘直後一時的に尿所見の増悪を示す例もあるが，摘出扁桃腺よりの非定型的溶連菌検出との間の相互関係を認めず，この増悪に溶連菌は直接の関与はしていないと思われる。長期間の観察でも，扁摘後腎炎の症状に特に影響を与えた例はなく，扁摘は扁桃腺炎による再燃予防の意義を認めるが，慢性腎炎の進行を

停止せしめるような好影響はきたさないものと考えられる。検出した溶連菌はエリスロマイシン，テトラサイクリン，クロラムフエニコール，ペニシリンに感受性を有し，サルファ剤は感受性を失っている例が多く，抗生剤の投与後咽頭より定型的溶連菌の消失を認めるが，その後時に溶血環の小さい非定型的溶連菌を検出した。補体価は腎炎発症期，再燃時には減少，経過した慢性腎炎，腎炎後蛋白尿の患者では正常であった。

第２編，動物実験：腎炎患者由来の溶連菌を使用して動物実験を試みた。第一実験：（実験動物家兎）Ａ群12型菌を使用し，第一群の生菌皮下注射群では一時的蛋白尿，軽度血圧上昇，３例中１例に腎主部尿細管に混濁腫脹を認め，第二群の腰部カオリン無菌膿瘍内継続的菌注射群の８例では一時的に蛋白尿出現し，組織学的には，２例に絲球体係蹄硝子様変化を，１例は絲球体腫脹，係蹄相互癒着，ホーマン氏嚢拡張，嚢内蛋白様物質の存在，主部尿細管混濁腫脹，上皮脱落，蛋白様物質管内充満を，他の１例は絲球体基底膜融合，嚢内蛋白様物質析出，下部尿細管水腫変性をみとめ，第三群のワクチン静注群では著変を認めなかった。

第二実験：D,D 系雄性マウスを使用し，腎炎患者由来のＡ群溶連菌および12型標準株の培養沪液をマウス腹腔内に２週間連続注射し３週間後に組織を検した。12型菌使用の５群では変化を認めず，Ａ群型別不能株使用の一群４匹中３匹に絲球体，主部尿細管に軽度の炎症を認めた。

以上の実験で腎炎患者由来の溶連菌を使用し，カオリン無菌膿瘍菌液注射群において腎変化を示すことができた。

論文審査の結果の要旨

第１編では，腎炎発症原因追因のため，溶連菌感染と腎炎発症との関係を研究した。急性腎炎発症期には，先行感染を認め，ASLO の上昇，咽頭培養で溶連菌特にＡ群12型菌を多く検出し，散発性大人の腎炎でも流行性腎炎と同様，特定の菌型の溶連菌が重要な役割を演じていることを示している。急性腎炎慢性化の再燃では感染を認めても溶連菌感染を認めず，一部にＢ型インフルエンザの感染を認めた。

急性発症不明慢性腎炎の再燃では溶連菌感染を認めるものがあった。腎炎後の蛋白尿群，亜急性期，慢性期の腎炎患者，ネフローゼ症候群では溶連菌感染を認めなかった。扁摘に際し，摘出扁桃腺培養で非定型的溶連菌の検出した例を認めたが，扁摘後の一時的増悪と相関関係はなく，扁摘により腎炎の好転は認められなかった。

第２編動物実験では家兎の腰部皮下にカオリン無菌膿瘍作製後腎炎由来の溶連菌を長期にわたって注入した群で絲球体細尿管に腎炎所見を認めた。

このように本研究は学術上有益にして，医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。